

大豆栽培情報 No.4

令和8年10月1日
三条農業普及指導センター

大豆収穫期のポイント

粒の肥大は良好！ 適期収穫で品質を確保しましょう！

1 管内の生育状況

・今年のエンレイの成熟期は10月15日頃の見込み

すでに葉の黄化がかなり進んで落葉が始まっているほ場も見られ、早いほ場では10月13日頃から収穫できると予想される。

・里のほほえみの成熟期は10月25日頃の見込み

葉の黄化の進んでいないほ場が散見される一方で、黄化が進んでいるほ場も一部で見られることから、今年は生育のばらつきが予想される。

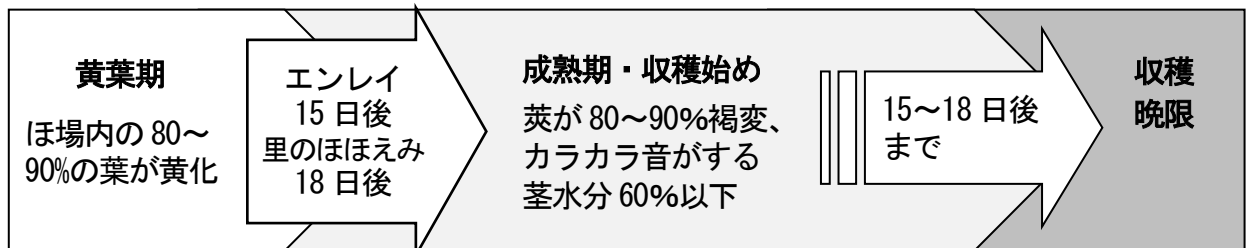
10月は平年より気温が高い見込みです（新潟地方气象台1か月予報 9/24発表）



2 収穫期対策

（1）収穫適期の判断

大豆の成熟期（収穫始め）のめやすは、黄葉期（ほ場の株の80～90%が黄化した時）から概ね2～3週間後となる。葉の黄化率や落葉株率から成熟期を予測し、計画的に収穫する。



※里のほほえみは晩生品種のため、黄葉期から成熟期までの期間がエンレイよりも長くなる

【葉の黄化率・落葉率と成熟期のめやす（エンレイ）】

黄化率 (%)	成熟期前 日数	落葉株率 (%)	成熟期前 日数
80（黄葉期）	15	100	3
70	16	80	5
60	17	60	7
50	18	50	8
40	19	40	9
30	20	20	11

黄化率：ほ場内の全ての葉の中で、黄化した葉の割合

落葉株率：葉柄を含め、全ての葉が落葉している株の割合



【成熟期的大豆】

茎水分約60%

茎に黄色はなく、全体が褐色で茎や分枝に茶褐色の斑点が出る

(2) 収穫作業時の水分めやす

成熟期以降に子実水分が 22%以下、茎水分が 60%以下をめやすに収穫を始める。

子実水分のめやす

子実水分	40%	20%	20%未満
子実の状態	豆が膨らんでいる。	豆は締まっているが指で力を入れて握むと変形する。	豆が硬く締まっており、爪を立てると僅かに傷がつく。(莢の表面にななめに爪痕状の凹みが見られれば子実水分はほぼ20%未満)

茎水分のめやす

茎水分	70%	70～65%	65～60%	60～50%	50%以下
茎の外観	緑色	黄色	褐色(黄色残る)	褐色(黄色なし)	黒斑点目立つ

(3) 収穫時刻

汚損粒の発生程度は、作物体の水分や土壌水分、気象条件によっても左右される。したがって、収穫時に汚損粒が発生しにくい時間帯は限られる(下表参照)。

前日、当日とも晴天の場合	11時～17時頃までの5～6時間程度
前日が晴れ、当日が曇りの場合	午前11時頃からの3～4時間程度
前々日までかなりの降雨や前日まで降雨が続いた場合	当日晴れても作業不能の場合が多い。

降水量や当日の天候にも左右されるので、必ず試し刈りによるチェックを行う。

(4) 雑草・青立ち株の除去、ほ場内で熟期の差が大きい場合の対応

雑草や青立ち株は、汚粒粒の原因になるため刈り取り前に除去する。とくに、毒性のある雑草であるヨウシュヤマゴボウ(赤色の汚れ)、イヌホオズキ(紫色の汚れ)の果実汁が付着した大豆は農産物検査の対象外となるので、収穫作業に入る前に確実に除去しておく。

帰化アサガオが発生したほ場では、再生防止のために帰化アサガオを地際から刈り取るか抜き取り、ほ場外で処分する。刈り取った帰化アサガオをほ場内に放置すると、未熟種子でもその後完熟種子となり、次年度に発芽する恐れがある。

ほ場1筆内で熟期の差が大きい場合は可能な限り刈り分けを行う。刈り分けできない場合は、ほ場全体の概ね9割以上が適期に達したら、事前に青立ち株を抜いて収穫する。

□ 収穫期までに必ず除去する雑草(⇒ 毒成分を含む果実汁がつくと検査対象外となる)

		
ヨウシュヤマゴボウ	イヌホオズキ(左図:株全体、右図:子実)	

(5) コンバイン収穫の留意点

ア 刈り高さ

コンバイン内に土砂を混入させないように、極端な低い位置での刈り取りは避ける（刈り取りの高さは10 cm程度）とともに、特に枕地での作業は慎重に行う。なお、土をかき込んだ場合は、汚損粒の発生を防止するため、すぐに作業を止めてエンジンを停止し土をかき出す。

イ 収穫ロス軽減

大豆が乾燥した状態の収穫では、専用コンバインのリール部分で発生する頭部損失（衝撃による裂莢や落莢による収穫ロス）が増加する。この損失を低く抑えるためには、収穫大豆の倒伏程度などに合わせたコンバイン操作が必要である。

倒伏程度	作業の注意点
無～軽度	リールを後方（運転席方向）の比較的高い位置に調節し、必要以上にリールが大豆に触れることを避ける。
中程度	倒れている大豆を引き起こすことが必要となるため、リールを前方（運転席から遠い）の低い位置に調節する。なお、立毛角度が40度程度までの倒伏では、向い刈りあるいは横刈りにより、頭部損失を軽減できる。

3 次年度に向けた秋作業

(1) 排水対策

ア 大豆の団地化

隣接する水田からの流入水を防ぐため、大豆ほ場を団地化した次年度計画を立てる。

イ 周囲明渠、補助暗渠の施工

秋のうちに周囲明渠や補助暗渠の施工をしておく、春先のは場の乾きを促進できるため、機械作業性の向上と生育初期の根の発達に効果が期待できる。

補助暗渠は本暗渠に対して垂直か斜めに施工し、本暗渠の排水能力を補助する。補助暗渠は容易に閉塞するため毎年施工するとよい。また、土壌の水分量が高いと施工しても崩れて埋まりやすいので、降雨の後は避けて施工する。

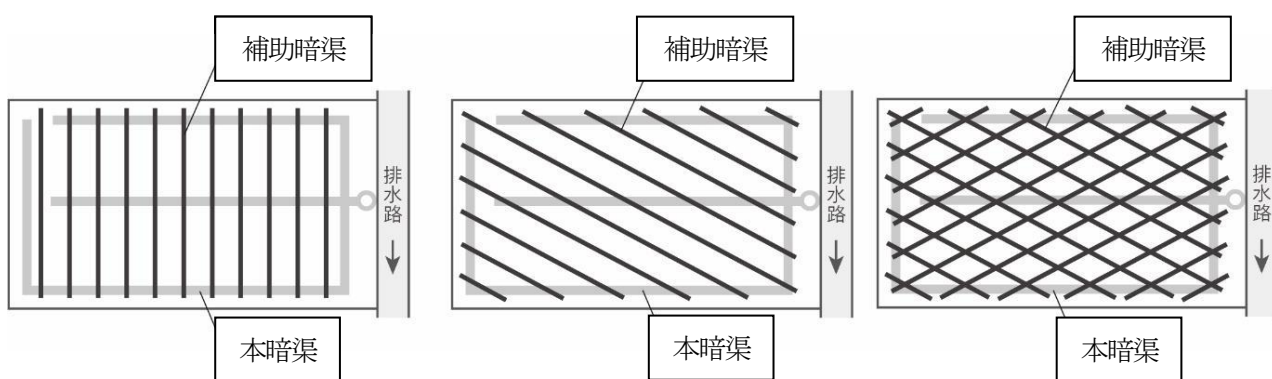


図 補助暗渠の施工例

(2) 土づくり

畑作物を連作することで地力が低下することが知られている。牛糞堆肥を乾物 500kg/10a 程度施用、またはもみ殻現物 330kg/10a に発酵鶏ふん現物 250kg/10a を合わせて施用する。